

る。①有形と無形、②済生の道と高尚な理論、③理系の学問と文系の学問、④起業と哲学研究、⑤（科学技術で便利な生活を）と（科学技術は贅沢を生む邪なもの）、⑥日常生活に利便性を求める・求めない。

では西洋の科学技術発達の根底にあるものは何なのか。久米は「バイブル」だという。バイブルが「盛大流行」していることで人々に「敬神」の心が強く芽生え、それが西洋を支え、国の富強を生んでいる（第十九巻）。ただ、バイブルの内容については「天ヨリ聲ヲ發シ」とか「死囚復活ク」で「瘋癲の譚語トナスモ可ナリ」であり、教会で執り行われる儀式についても奇妙なものだと感想を述べている。にもかかわらず、久米がバイブルやキリスト教を否定していないのは、宗教の役割とは人によりき行いをさせる機能だと考えているからだ。日本にはバイブルに匹敵するほど敬神の心を人々に呼び起こさせるものがない。それも科学技術が発達しなかった要因であることを示唆している。

岩倉使節団から約五十年後の大正九年、先述したように日本では豊田織機が紡全工程機械製造に成功し、西洋に追いついた。久米が考察したとおり、西洋の科学技術は五十年で追いつけるものだったのだ。しかし追いついた時点で、久米の物質科学に対する考えは変化している。それは「追いつく」ものではなく、むしろ止めなくてはならないものとなっている。論文冒頭で久米は人文系の学問の衰退を嘆き、その衰退が科学の暴走を放置し世界規模の戦争を許したと述べ、求められているのは科学技術を支える思想であるという。人間の幸福とは何なの

か。それは物質の科学技術にはないということである。九十年前に科学技術の限界を看破していた久米の言葉に耳を傾けるべきではないだろうか。

神との出会いと自然をめぐる諸経験

——透谷・独歩・蘆花の場合——

柴田真希都

本研究は日露戦争前後から読書青年たちの自然体験の案内となった書物『自然と人生』（一九〇〇）と『武蔵野』（一九〇二）の著者、徳富蘆花（一八六八—一九二七）と国木田独歩（一八六九—一九〇八）を取り上げる。彼らが後に知識人・宗教家となる青年らの、自然を見る眼やそのさいの感情の持ち方を導き、それらの一般への普及という点でも重要な役割を果たしたであろうことを重くみて、彼らが日本近代に刻んだ（神との出会いにおける自然）の諸相を確かめる必要を認めたからである。この二人に加え、彼らの同時代人であり、いち早く世に出て夭折した北村透谷（一八六八—一九四）を加えることにより、彼ら「弟達の世代」（前田愛）の代表者が、日露戦争以後の青年層に明け渡した神と自然にまつわる思索の傾向、特にキリスト教に関わるそれを四次元的に再構築したいと考える。

本研究は日本の諸思想の連なりを（神との出会いにおける自然）という観点から整理しなおしてみようという試みの一部にあたる。それゆえ、まずは神体験や神探求にふれたテキストを

参照し、そこにおいて自然が意識的に、または無意識的にどのような位置を与えられ、どの程度の役割を果たしているのかの検討を行う。次に彼らの自然への言及全般を精査することを行い、神体験における自然の位置・役割と、いわゆる自然観がどのような関連にあるのかを探る。その試みにあたり重視しなければならない基準としては、①「我」に対する自然の内的・外的位置づけ、②歴史観、とくに終末論における自然の意義の確認、③聖典テキスト（本研究ではとりわけ聖書）の記述への参照性、ということを考える。

独歩は当初ワーズワースの影響下に、他者である自然と精神的交感を得ようとする志向が強かった。彼においては神を求め経路と自然を求める経路がほぼ一致していた。しかし二葉亭訳ツルゲーネフの自然記述に感動して自然を見る眼を更新し、創作に打ち込む中、やがてキリスト教からも離れる。晩年に至るまで彼は自然の愛好者であったが、その自然観は聖書と接続されることはなく、遂に神体験にも結びつかなかった。透谷の場合、神との出会いは内心の最奥の出来事とされた一方、神仙思想や幽冥の境地に魂の自由を求めることも多く、その視線は揺れていた。聖書の記述を等しく重視する立場にたち、創造・救済・終末論にも理解があり、自然を聖書の各所に結びつけて捉える記述も見られたが、聖霊の到来による神との一致に心ひかれ、十字架や復活の出来事は消えている。蘆花は前二者とは異なり、自覚的な神体験を三度経ている。そこでは大自然や田園生活が極めて重要な装置として機能しているのが目を引く。さらに、その後の彼の自然観察は聖書の記述と接続されること

が多くなる。彼は精神革命を経て、失っていた聖書への信を新たにし、独自の表現を伴って復活とキリスト再臨思想に集中していくが、その過程で聖書を深く読み直すことにより、自然や宇宙の終末論的意義にも目を開かれていったとみられる。

このような三者の（神との出会いにおける自然）の諸相を比較すると、彼ら世代における三様の求道と創作の連関が示される。独歩は創作が軌道に乗ると、自然よりも人生模様に関心を示し、自然が後景に退くにつれて、自然と同方向に認められた神への意志も減退した。「驚異哲学」を支えた自然や神への関心は、生や死の現実味に置き換えられている。透谷は、その聖書への信と知を十分に創作に生かさず、遂にそれらは創作のモチーフと分離したままに見える。重視した聖霊との決定的出会いは果たせず、晩年は東洋的な精神の自由（自然との合一）へと傾斜した。蘆花の場合、神体験と懺悔告白により、神探求の精神が創作のそれを取り込んで一本化した。神の被造物である自然の事柄は、聖書の創造論や終末論により理解され、その上で農の生活を形作る必須物として経験され、親しまれた。

山村暮鳥のキリスト教思想

岩野 祐介

山村暮鳥は言うまでもなく大正期を代表する詩人であるが、日本聖公会の伝道師でもある。一般的な文学史研究からも、また日本聖公会史研究からも、これまでキリスト者としての山村